

言語聴覚療法学科における 基礎ゼミの現状と課題

ー基本的臨床スキルの向上 を目指してー

太田 栄次, 内藤 健一, 松山 光生
九州保健福祉大学保健科学部
言語聴覚療法学科

言語聴覚障害基礎ゼミⅠ、Ⅱ（以下基礎ゼミ）は本学科の1、2年次生に対して、主体的な学習の根幹をなす「読み」「書き」の確実な定着を図るとともに、それらの能力を伸ばすことを目的として開講されているものであり、現在3人の教員（太田・松山・内藤）で担当している。本発表では、まず、この科目の学科での位置づけを紹介し、基本的臨床スキルを設定した。その後、本学4年生に対して行ったアンケート調査の結果、及び昨年度の基礎ゼミの取り組みの現状を踏まえて、現在行っている教育プログラムを見直し、今後どのような教育活動を行えばよいのかについて考察した。

キーワード：基礎ゼミ、基本的臨床スキル、アンケート調査、1分間スピーチ

Ⅰ. 基礎ゼミと基本的臨床スキル

1. 基礎ゼミの位置づけと目標

近年、日本の18歳人口の減少による競争率の低下、ゆとり教育、入試の多様化等による、大学生の学力低下、特に、日本語の読み書き能力の低下が問題となっている中で、この科目のような基礎教育は、導入教育としての役割を果たすことも求められている。一般に、導入教育で行われている教育では大学での“学び”を下支えする能力である「聴く」「話す」「読む」「書く」「調べる」のようないわゆるアカデミック・スキルの育成を目指す教育が多く取り入れられている。もちろん、このような教育が伸ばそうとしている能力が専門科目の学習や卒業研究等にとって不可欠なものであることは間違いない

が、大事なことは本学科が言語聴覚士養成校であるという特質を考慮して、それに合ったオリジナルの教育内容を提供することではないかと考える。そのような認識に立ち、我々は基礎ゼミにおいて、より臨床の現場を意識した到達目標を設定することとした。このような目標を設定することで、ややもすると目的意識が希薄になりがちな基礎教育においても、学生に明確な目標を認識させることができ、より積極的に学習に取り組ませることができるのではないかと期待もある。

2. 臨床の現場で求められる基本的臨床スキル

臨床の現場で求められていることは、専門的な知識や技術だけではない。身につけた専門的な知識や技術を十分生かすためには、自分や他人の持っている“考え”や“情報”を的確に伝えたり、読み取ったりする能力や必要な情報をすばやく得たり選別したりする能力が必須である。一般的にある作業を遂行する能力のことを“スキル”というが、特に臨床現場での作業を遂行する基本的能力を「**基本的臨床スキル**」と呼ぶことにする。

この基本的臨床スキルは、複数の臨床活動にまたがる一般的な能力のことであり、作業を遂行するための技術的な能力以外に作業を円滑に進めるための態度も含むものである。また、今回この基本的臨床スキルがどのようなものかを考えるにあたって、前述したアカデミック・スキルズ概念を基礎として発展させた。つまり、基本的臨床スキルとは「臨床現場の遂行を高めるため、アカデミック・スキルズを基礎とした臨床活動複数の活動にまたがる一般的能力または態度」と定義することができる。

基本的臨床スキルは主に「聴く」「話す」「読む」「書く」「探す」の各スキルからなるが、それらのスキルは質的な違いがある。そのため、いくつかに分類した。まず、基本的臨床スキルを大きく「聴く」「話す」「読む」「書く」のようなことばの双方向的なやり取りを基本としたコミュニケーションスキルと、「探す」のような情報収集スキルに分けた。さらに、コミュニケーションスキルの中でも「聴く」「話す」は常に特定の相手とのやり取りであるため、場面の違いによってそのあり方が異なる。このことを考慮

し、これらのスキルを「読む」「書く」のような、言語を介在とするが、常に特定の相手とのやり取りであるとはいえないものと区別した。

様々な臨床の活動場面でこの基本的臨床スキルが必要とされるのであるが、どのような活動でどのようなスキルが主に必要とされるかを整理するために、それぞれの具体的な臨床活動と「聴く」「話す」「読む」「書く」「探す」の各スキルとがどのように対応しているかを考えた。この対応を考える際には、言語聴覚士(以下ST)として臨床現場の経験が豊富な本学教員に助言を受けながら進めたが、臨床場面ではことばのやり取りを介した活動以外に、相手の表情や態度等から必要な情報を読み取るといった言語的スキルを介さない活動も重要であるとの指摘を受けた。そこで以上で挙げたスキルに加え「観る」という非言語的スキルを加えた。基本的臨床スキルを構成する各スキルとの関係を図1に、基本的臨床スキルの各スキルとそれぞれの臨床活動の対応関係を表1に示す。

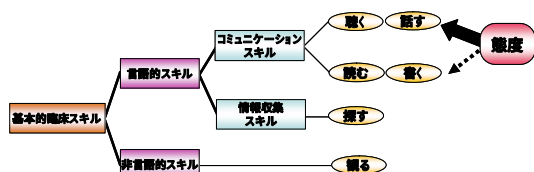


図1 基本的臨床スキルを構成する各スキル

表1 基本的臨床スキルを構成する各スキルと、臨床活動の対応

スキル	臨床活動
聴く	患者の訴えを聴く
	患者に対して問診を行なう
	家族の訴えを聴く
	家族に対して問診を行なう
話す	他のスタッフからの申し送り(引き継ぎ)を聴く
	電話をかける
	患者や家族に対してフリートークを行なう
	患者や家族に対して問診を行なう
読む	ケースカンファレンスで発表する
	患者や家族に説明する
	他職種に情報提供を行なう
	他職種に情報提供を行なう
書く	論文を読む
	症例報告を読む
	カルテを読む
	カルテを書く
探す	実習生プロフィールを書く
	患者の状態を記録する
	実習日誌を書く
	実習計画書を書く
観る	報告書を書く
	手紙やお礼状を書く
	本を探す
	論文を探す

II. 学生に不足している基本的臨床スキルと、基礎ゼミの取り組みの現状

1. 外部臨床実習を終えた4年生に対する調査 I. の2. にて定義を行なった基本的臨床ス

キルの中で、実際、本学科の学生に不足しているのはどのスキルなのだろうか。このことを明らかにするために、昨年度、6週間×2回の計12週間の「外部臨床実習」を終えた4年生41名に対してアンケート調査を行なった。

調査に用いた質問紙は選択式と自由記述式の2つから構成されていた(本報告では前者の結果のみについてふれる)。質問項目は大きく「聴く」「読む」「書く」「話す」「観察する」「探す」の6つのスキルに分かれていた。そして「聴く」については「患者の訴えを聴く」などの5項目、「読む」については「論文を読む」などの4項目、「書く」については「実習生プロフィールを書く」などの8項目、「話す」については「実習施設への挨拶や確認等のために電話をかける」などの6項目、「観察する」については「患者を観察する」「保護者、家族を観察する」の2項目、「探す」スキルについては「本を探す」などの3項目から、それぞれ構成されていた。以上の各項目について、実習中に体験したか(した・しなかった、の2件法)、うまくできたかどうか(以下、遂行度; 1: 全然できなかった~ 5: 大変よくできた、の5件法)、その活動はSTの仕事にとって重要だと思うか(以下、重要度; 1: 全然重要ではない~ 5: 大変重要である、の5件法)を尋ねた。

4年生から得られた各項目の遂行度、及び重要度の平均値から、各項目を4つのパターンに整理した(表2)。表2を見ると、STの仕事にとっての重要度が高く遂行度が高い項目の割合が最も高い一方で、重要度が高いが遂行度が低い項目(次ページの表3を参照)も、32%見られた。

表2 各パターンに該当した項目数

各パターン	項目数
<パターンI> 重要度が低く遂行度が高い項目	3項目(11%)
<パターンII> 重要度が低く遂行度が低い項目	1項目(4%)
<パターンIII> 重要度が高く遂行度が高い項目	15項目(53%)
<パターンIV> 重要度が高く遂行度が低い項目	9項目(32%)

2. 昨年度の基礎ゼミIとIIの取り組みの現状 次に、基本的臨床スキルの向上を目指した基礎ゼミを行なうために、昨年度の取り組みの現

表3 重要度が高く遂行度が低かった具体的項目名

構成要素	項目名
話す	ケースカンファレンスで発表する
	患者や家族に説明する
	他職種に情報提供する
読む	カルテを読む
書く	患者さんの状態を記録する
	カルテを書く
	実習計画書を書く
	報告書を書く
探す	論文を探す

状を整理した。具体的には基礎ゼミⅠとⅡの各回の授業内容について、基本的臨床スキルを構成する各スキルのどれに当てはまるのかを調べ、全体を100%としたときの各スキルの割合を算出した。その結果、基礎ゼミⅠでは、「聴く」（ノートの取り方）が6.3%、「話す」（夏休み読書課題・発表会）が12.5%、「読む」（「書く」と同様）が31.3%、「書く」（読解と作文技術の向上、論理的な思考力、文章力を養う）が43.8%、「探す」（インターネットを用いた本の検索の仕方）が6.3%であった。基礎ゼミⅡでは、「話す」（学術論文のまとめと発表など）が27.8%、「読む」（読解と作文技術の向上、学術論文の種類と構成など）が27.8%、「書く」（読解と作文技術の向上）が11.1%、「探す」（図書館の蔵書検索の仕方、データベースの検索の仕方など）が33.3%であった。このことから基礎ゼミⅠでは「読む」と「書く」に、基礎ゼミⅡでは「話す」、「読む」、「探す」に関する授業が多かったことが分かる。また、基礎ゼミⅠにおける「読む」や「書く」では数百字程度の保健や福祉分野の文章を「読んで」それに対する意見文などを「書く」授業が多かったが、基礎ゼミⅡにおける「話す」、「読む」、「探す」では言語聴覚障害に関する学術論文を「探し」、「読み」、その内容を分かりやすく「話す」授業が多かった。なお、基礎ゼミでは、上述した内容に加えて、毎回、コラムの要約と1分間スピーチと題した授業も行っていた。これは授業の1週間前に新聞のコラムを配布し、授業までにそれを読んで200字以内に要約すること、コラムの内容を元にして学生の前で1分間スピーチを行なうことができるように準備してくることが宿題として与えられ、授業の際に、2人ないし3人の学生を指名して1分間スピーチを行なわせる（スピーチを聴く学生はその内容を聴いてメモを取る）というものである。この授業内容には「聴く」「話す」「読む」「書く」といった各スキルが当てはまる。

Ⅲ. 基本的臨床スキルの向上を目指した 今後の基礎ゼミの取り組み

4年次生の調査では、外部臨床実習において重要度が高く遂行度が低かった項目をスキル別にみると、「話す」、「書く」に分類されるものが多かった。さらに、具体的項目をみると、「話す」には「ケースカンファレンスで発表する」、「患者や家族に説明する」、「他職種に情報提供する」、「書く」には「患者さんの状態を記録する」、「カルテを書く」、「実習計画書を書く」、「報告書を書く」が挙げられた。また、平成18年度の時間数をスキル別にみると、基礎ゼミⅠ、Ⅱを通して、「聴く」、「話す」、「読む」、「書く」、「探す」の5つのスキルは比較的バランスよく配分されていたが、「観る」に該当する活動が設けられていなかった。

これらを鑑み、年間スケジュールと個々の活動の2つのレベルから見直す必要がある。

年間スケジュールの改善点として、事物や事象を観察し、それらを文章で表現し、相手に伝えるという目標を新たに立て、具体的な活動を加えたい。その設定理由は、「観る」のスキルが皆無であり、「患者さんの状態を記録する」、「カルテを書く」、「報告書を書く」の3項目と深く関連すると考えられるからである。

個々の活動について、「1分間スピーチ」を例に挙げると、ケースカンファレンス等の他職種に対して情報を的確に伝達することを念頭に置き、今年度に入り、以下の2点の工夫を行った。ひとつは、意見を述べる型や説明を行う型などの文章の型を学習させ、それに沿って読み原稿を組み立てるようにしたことである。もうひとつは、読み原稿を読み上げるのではなく、要点のメモのみをみて発表させることである。

これらの工夫によって、より実践的なスピーチが可能になると考えられる。今後さらに、この活動を発展させ、聴かせる相手の人数や属性、場面を具体的に想定し、各場面に応じたスピーチを工夫することや、場面に相応しい態度を学習させたい。また、これまで行ってきた活動についても、同様に、それぞれがねらいとした臨床スキルの基礎となり得ているか再度見直ししながら、改善をしていきたい。